

昭和20年のナイトフォー

一頁

ノンラーの賢人が 捨てられた道を指して
海沿いに 海沿いに 見も知らぬ炎を躍らせた

平澤進「白虎野」

いふ側面に、それが無くなつたことで初めて氣が付いた
のでした。

生き永らへただけ儲け者と思ふべきところを、なんと、
贅澤なことせう。しかし、これは偽はるなき私の實感
でござりました。その日を生きること丈だけを考へてゐた、
それより外ほかに考へる余裕のなかつた時には必要なかつた
者が、今の私には必要なのではした。それで、私は終戦間
際に目にした、あの不思議な光景をかうして書き留め、
整理することにしたのです。さうして、私はやうやく、
自分の居場所を知り、我が二本の足で歩めるやうに思ひ
ます。のちにこれを目にする方がをらるれば、私の経験
を宜しく御批評され、その正体を明かされることを願ひ
ます。

私は、諏訪にて神祇を任せらる者にございます。幼少

紀元二六〇五年 九月

玉音を賜たまはつて後の、眞つ白な秋の諏訪にて、私はこの
書を認しめためる決意をいたしました。戦争があらゆるものを
拭ひ去つてしまひ、私どもは、何も無い野原にぼつ然ねんと
取り残されたやうになつて、これから何をするとも、せ
こへ行かうとも、全く知れない、迷子まよひのようになつてを
りました。

長く私たちに不安をもたらしてゐた、戦争といふ怪物
が無くなるや否や、私たちは新たな不安に襲おそはれたので
す。戦争が、私たちの生活に方向性と場所を提供したと

より秘傳ひでんを授かること幾年、風祝なる職を頂き、神に仕

へて参りました。最初に申し上げておかねばなりません
が、他の神祇官の場合はいざ知らず、私の場合、神にお
仕へするといふのは、文字通り、實際的な生活の形態と
してのことでした。私の目には、諏訪の御祭神の二柱が、
人形ひとがたを纏つて御降臨あそばされ、地を踏み人の子らと戯
れるお姿が見え、私の耳は二柱の神の御言葉、息遣ひに
よつてくすぐられること茶飯にして、湯を浴まれる神の
御背中をお流しすること常々でございます。氣き狂きちがひの繰
り言、うは言と云はれるでせうが、この点を宜しく御了
解頂かねば、この文じたい、無用の長物となりませう。

二柱は、巷間ちやうまに於きましては様々に呼ばれてゐますが、
私にはかう仰おほせになりました。

「さう畏おそまらなくてよい。八坂神奈子、神奈子と呼ぶや
うに。」

「右に同じく。洩矢諏訪子、諏訪子と呼びなさい。」

風祝を任せられてより、さうして私は二柱に仕へて参
りましたので、以下、神奈子様、諏訪子様と書くことに
致します。二柱のお姿は、私の一族の中でも血の濃い者、
ある種の靈驗、加護を持った人物、または一部の感じや
すい小供こどもなせには見えるやうでした。私が、今も氣にし
てをります、一人の女の子にも、二柱の姿は見えてをり

ました。

戦争はいよゝ激しさを増し、諏訪の地は、疎開地と
して婦女子、學童を受け入れました。我が社も社務所、
寮などを開放し、東京の尋常小學校から來た、集團疎開
の小供たちが寢泊まりしてをりました。件くだんの女の子は、
そのうちの一人でした。

例へば、それは疎開を受け入れて間もなく、夏が始ま
らうとしてゐた頃であつたやうに思ひます。

疎開學童の暮らしは規則正しく、先生によつて指導さ
れてをりました。はやくに起床し、寮や境内、神殿など
を掃除してあちこちピカピカにして呉れるものですから、
私の仕事が無くなり、かへつて手持無沙汰になるほぞで
した。しかし先生が、これは宿を頂いているお禮であり
ますから、なせと仰るので、無下にするわけにもゆかず、
私は監督と言ふ體ていで彼らの仕事ぶりをながめ、彼らを譽
めるくらいしかできぬのでした。彼らは皆まじめで、一
所懸命に作業をして呉れました。

「兄さんがお国のために戦つてゐます。ぼくはせめてこ
こでお役に立てなければ、悔しい。」

と云つた男の子がをりました。彼らなりに、自分の身
の置き所を考へてゐたやうでした。

さうして朝の掃除が終わると、やうやく朝ごはんにな

りました。ごはんはたいいてい、洗濯のりをさらに薄めたやうなものに、おいもの一かけや葉つばが入つたらくらの、すいとんやおかゆがせいとくでした。育ちざかりの學童たちのために、氏子の方々も協力を惜しまず、良くして下さつたのですが、配給と併せてもそれを用意するのが限界でありました。皆、ひもじからうに、どろどろのすいとんを目いっぱいすゝり、食べ終はればちつと堪へる、そのさまはけなげで、いぢましいものがございました。

そんな状態でございましたので、我が社でも、先から、他の學校やお寺がさうしてゐたやうに、土地といふ土地を耕し、作物を作らねばなりませんでした。少しでも食べるものの足しがないと、とてもではありませんがやりきれませんでした。

神社に於ける土地と云へば、当然、境内になります。境内は神の坐し、遊ばすところですから、土地は廣く使つてをりました。石疊のわき、土の露出した場所には全て鉄が入り、畝が形作られました。当初、神域にこのやうなことをして良いのか、神奈子様にお伺ひを立てたところ、神奈子様はカラ〜とお笑ひになりました。

「民草が食はねば、神も食へぬ。むざと使へるものを使はずに飢ゑる法はあるまい。」

その懐の廣いご様子に、私は自らの信仰の淺はかなるをや、恥ぢるほゞでございました。さうして、境内はすつかり、土と草のほひのする場所になつたのでした。神殿の前のこま犬だけが、社の威容をからうじて保つてゐて呉れました。このこま犬は、金屬徵発と云つて、戦闘機や船の材料としてお国に提供せねばならなかつたところを、氏子の方がたの盡力によつて、それを免れたのでありました。

件の日も、學童たちはそんな境内で働ひてをりました。春に植ゑたサツマイモの畝に水をやり、草をぬきました。また、唐もろこしを植ゑるために、土を耕し、灰をまきました。

野良仕事に精を出す學童たちを、本殿の階から、神奈子様と諏訪子様が見守つておいででした。普段はずつと本殿においでのところを、アラ、珍しい、と思つてをりますと、神奈子様がこちらに一瞥を下すつたので、默禮をお返しいたしました。

「人の子らの、働く姿は好い。」

神奈子様、諏訪子様、二柱お並びになつて、慈しみをたたへた笑みをこぼされました。私は不圖、二柱は幾百、千年も前より、かうして諏訪の民を慈しんでをられたのだ、と思ひました。

「ネ。ご覧よ、あの子。」

と諏訪子様が仰つたので、私と神奈子様の目はそちらに注がれました。ぬばたまの黒髪の、皆と同じくひもじい思ひをしてゐるだらうにも關らず、うつくしいみどり様が目を引く、おかつぱの女の子でございました。諏訪子様の仰つた子がその子だとすぐ分かつたのは、その異様なうつくしさの所爲もありませう、けれど、彼女が學童の中でたゞひとり、神奈子様たちの方に目を向け、いえ、確かに神奈子様たちを見てゐた所爲でございました。

女の子は草むしりの手を止め、おつと神奈子様から目を離しませんでした。神奈子様も面白さうにその視線をうけとめ、両者にらみ合ふやうな形になつてをりました。やがて、女の子は草でいつばいのかごを畑に置き去り、石壘を踏みしめて本殿の前までやつて來たのです。女の子は口を一文字に結んで神奈子様を見てゐましたが、やがて、大きく息を吸つて、口を開きました。

「お姉ちゃん、神様なの。」

その、挑みかかるような口調に、私はハラ／＼と胸を騒がせてをりましたが、私の心配をよそに、神奈子様はたいへん楽しさうに口元を釣り上げました。

「あゝ、さうさ。よく分かつたね。」
分かるわ、と女の子は当然のやうに云ひました。

「だつて、全然、みんなと違ふもの。」

「へえ、どこが。」

「違ふの。なんでも、違ふの。」

女の子は理屈とは違ふ、勘や感覺によつて、神奈子様たちの正体を直感してをり、それを言葉にしやうとして、云ひ難さうに顔をしかめ、結局このやうな答へをしたのでした。これには諏訪子様もたいさう興味であつたらしく、階から身を乗り出して云ひました。

「それで、私たちが神様だつたら、さうしたの。」

「お願いがあります。」

「云つてご覧。」

「私たちに、ごはんを下さい。おなかいつばい、食べさせて下さい。」

「お嬢ちゃん、私は神だよ。何んでもできるんだ。そんなことで良いのかい。もつと大きなことを願つて良いんだよ。戦争に勝たせて下さいとか、億万長者になりたいとか。」

「戦争は勝つても負けても、あんまり關係ないと思ふ。」

それより、みんなが悲しんでゐるのは、おなか为空いてゐる所爲でせう。おなかさへ膨れれば、いつでも、どこにゐても、仕合はせのはずだもの。それだけ仕合はせでも、おなか为空いたら、生きていかれないもの。」

私は思はず辺りを見回しました。官吏が通りかからうものなら、いえ、官吏に通報するやうな人がゐたとしたら、女の子の発言は少々問題がありました。しかし、やはり今度も心配してゐたのは私だけのやうでした。

「違ひない。」

「さうだ、さうだ。」

二柱はお腹を抱へてお笑ひになりました。さうして、ぼかんと呆氣にとられてゐる女の子の頭をかき撫でかき撫で、御免、御免と仰いました。

「私らが神様だなんて、嘘よ。神様が、こんな、ちんちくりんのはずがないでせう。」

と神奈子様は仰つて、諏訪子様の帽子を叩きました。

誰がちんちくりんだつて云ふんだい。と諏訪子様はお怒りでしたが、神奈子様は相変わらず笑つておいででした。

「でも。」

女の子は何か言ひたさうにしてゐましたが、言葉が見つからないのでせう、もどかしさうに唇をへの字に結んで、二柱を見上げてゐました。神奈子様は笑ひを引つこめると、眞剣な目になつて仰いました。

「あなたたちの神様なら、ちやんとゐるぢやないの。すめらみことつて謂ふ神様がさ。あの神様がきつと、叶へて下さるんぢやないか知らん。今にお腹いっぱい食べさ

せて呉れるでせう。あの神様はちやんとあなたのお願ひも分かつておいでだよ。ホラ、仰つてゐたぢやないか、朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。と、ね。」

私はまたも驚かされました。神奈子様がそらんじたのは、まぎれもなく、教育勅語の末尾の一説でした。神たる神奈子様の口から、人間の書いた、手の覺束ない言葉が詠ぜられたといふこと、神奈子様が人間の營みをよく見ておいでであるといふ証でございました。私は驚き、自らの信仰の至らなさをまた感じたのでありました。この一文の意味は、すめらみこととは国民と共にあり、上下心をひとつにして勅語の理念を守り、徳の道を歩まうといふ決意でございました。

案の定と申しませうか、まだ幼き女の子は、神奈子様のお言葉をつかみかねたやうで、困惑し乍らも何某か言ひ募らうとしたやうでした。しかし、そこで、先生が彼女の名を呼んだのでした。

「あなたの仕事は終つたのですか。皆が働く中で、調和を亂すのは、見苦しいことです。あなたは非国民になりたいのですか。」

女の子は私たちをチラ／＼と窺ひましたが、やがて、渋々のやうに背を向けると、畑のはうに歸つてゆきまし

た。わたしはズツとドキ／＼させられ放しでございましたから、ホウ、と大きな息が漏れるやら、あの子のことが氣になるやら、でございました。

おほむね、かうして日々は過ぎてゆきました。空襲の影に怯へ、警報に驚かされ乍らも、しづかな、平穩無事な毎日を、私どもは土のかほりのする境内で生徒たちと汗を流しつつ過ごしたのです。親とも離れ離れの子らは、日々を送るのにもまさに必死でございました。ラヂオからは苦しさの隠しきれぬ戦況放送が、それでも戦争に勝たうといふ國民の意氣地を折つてしまはぬやう、精一ばいの空元氣を振つてをりましたが、我々にはもはや戦争が勝つとか負けるとか、どうにも感動が擦り切れてしまひ、どかく生きてさへぬればよい、生きよ、と、声ならぬ声に動かされるやうに、土をほじくり、すいどんをするのみでございました。そんな私どもを、諏訪の二柱はあわれみの目で見守つて下さいました。欄干に座る神奈子様や諏訪子様に、あの女の子はことあるごとに話かけました。無知ゆえか、別の何者であるのか、神を前にして物怖じせぬ様子は、まるで只人ただひとならぬやうに思はれました。生れつゝの神通力を持つのでせうか、もし守矢、または東風谷の家に生まれてゐれば、我が後繼として育てるべき子であるようにすら思はれました。

疲勞による無感覺、永遠に續くかのように思はれた倦怠も、終る時には、まつたく不意に、無責任にぱつたりと終わるのだと知りました。八月十三日がやつてきたのでした。この日は、八月十五日以上に、私の記憶に残るのです。

目覺めた、と思ふよりも早く、私の體からだは床から跳ね起きてをりました。耳をやすりで削られるやうな煩はしさの正体が、うなりたてる空襲警報なのだ知り、やつとこのことで私の意識は明確になりました。寢所はやゝ薄暗く、どうやら普段床をあげる時間より少し早いやうに見えました。社務所のあちこちで、ふすまの開く音と、足音が聞こえ、先生の大声で怒鳴るのが足音と警報にかき消されさうになつてをりました。

着の身着のまゝ、寢間着の裾をからげ、私は成る丈平靜を保つて、先生たちに合流しました。先生たちは生徒たちに並んで外に出るよう指示を飛ばし、布團に居残る小供たちの尻を叩いてをりました。

「慌ててはいけません。並びなさい。急いで避難するのですよ。慌てず、急ぎなさい。」

生真面目な先生の叫びに、なかには微笑する小供さへをりました。幾度も繰り返された、この避難の狂騒は、何度あつても慣れぬものでありましたし、しかし、そこ

か滑稽でもありました。今まで諷訪の地が実際の被害もなく、戦闘機の通り過ぎる影に怯えさせられては何事もなくすごとくと社務所に戻る、といふ、無益な往復運動をさせられてきたのでありますから、それも当然とも言へたのかも知れませんが。もちろん、各地から漏れ聞こえてくる空襲の恐怖とは背中合せでございましたけれども。

小供たちは凡そ先生の指示に従ひ、廊下に列を作つて社務所を小走りに出てゆきました。一糸亂れぬとはゆかぬまでも、不斷の教練の成果の發揮と見え、はぐれたり逆らつたりする子ををらず、避難は順調にすすんでゐたやうでした。

さうして、もう社務所に残るのは私と先生たちのみであらうという段になり、防空壕に向かはうとしたとき、小供たちの寝泊りする大部屋の一つに、ある先生が居残つて、何か云つているのを見つけました。彼の足元には布團があり、一人の小供がゐたのです。さうです、あの女の子でした。先生は、あの女の子の名前をずっと叫び續けてゐました。

「どうしたんだ。防空壕へ行かう。爆弾で焼け死んでしまふよ。」

女の子は布團の上で上体を起こしたまゝ、見るともな

く正面を見てをりました。しかし、その目は、何も見てをらず、人形めいて、精氣というものが凡そ感じられないものでした。

私が彼らに近寄つたとき、先生は考へあぐねて、つひに女の子を肩に担いで行かうか知らんと腹積もりしたばかりのやうでした。私に氣付くと、あ、と言つて手を止め、會釋えしやくしました。私は頷いて、女の子の目を覗き乍ら肩に觸れました。女の子の目が、未だ光を燈してはをりませんでした。震へたと思ふと、ゆつくりとこちらを向きました。

「どうしたの。防空壕へ行きますやう。」

私は内心ほつとし乍ら、彼女の肩を抱きました。彼女はぼつりと、

「怖い。」

と云ひました。それは全くの不意打ちで、理由もわからず、なのに、私は胸の締め付けられるやうな感じがしました。丸で、これから起こることが、いつもの無益な避難に終る筈がないと直感せしめらるやうな、不安、恐怖でありました。

私がある場に釘付けされたやうになつてゐると、彼女は虚ろな目のまゝで立ち上がり、先生に肩を抱かれて歩き出しました。ほとんど幽鬼の動きでございました。

「神主様も、避難しませう。」

と、先生が云ふまで、私はでくの坊みたやうに立つてゐたのでした。

「私は、神殿を点検してから参ります。どうぞ、早く、お先に。」

女の子と先生を見送り、社務所に猫の子一匹残つてゐないのを確認して、私は神殿へ向ひました。神殿のさざはしで、神奈子様と諏訪子様が空を見ておいででした。私がお側に参つても、二柱はするどい目つきで、何かを睨めていらつしやるやうでした。神奈子様、とお呼びしやうとすると、それを遮るやうに、神奈子様は仰いました。

「いゝから、あんたも壕に入りな。」

「こつちは、大丈夫だからね。」

諏訪子様が請け合ひ、その口調の、異様な壓力に、私は伏して従うしかありませんでした。さうして、私は、ブウンといふ、羽虫の親玉みたやうな、戦闘機のエンジン音が、風に乗つてやつてくるのを聞いたのでした。空を仰ぐ二柱は何をお考へか、私には畏れ多く察しかねましたが、その神力、加護を信じ、ふかく禮をして、私は防空壕へ向かひました。

防空壕は神殿の裏、山の麓の、かげになつたやうなと

ころに掘つてありました。元々は私と、近所の氏子の方々の何人かが入れば良かったのですが、疎開學童のために、急ぎで廣く、深く掘つたもので、壁の形がいびつで、一層くらい感じがしました。

廣くとられた入り口をくぐつて壕に入ると、一寸した騒ぎになつてをりました。皆そろつて忙しく首を巡らしては顔を見合わせ、二三言何か云ふとまた別の者と顔を見合わせてをりました。とくに、先生たちがソワ／＼と落ち着きのない様子でした。どうしたのです、と、近くの先生に尋ねると、すぐに答へが返つてきました。

「小供が一人、行方がわからないのです。」

そう云つて、先生が口にしたのは、まさに、あの女の子の名前でした。先刻彼女を引率した先生は、こゝに来るまで、確かに彼女の手を握つてゐたはずなんだが、としきりに首を傾げ、不思議がるやら、氣味悪がるやら、何にせよ、ひどく怯へ、恐縮した様子でした。

私が立ち上がらうとしたとき、ブウン、と、さつさの何倍もするやうなエンジン音が山を震はせました。

「探しに行きませう。」

私がさう云ふと、壕の中がシンと静まり返りました。洋燈ランプひとつの薄暗い壕の中が、いちだん暗くなつたやうに思はれました。皆、先生までも、口をつぐんで目配せ

し合ひ、そして、そこから考へが進みあぐねるやうでした。その折にもブウンと戦闘機は頭上を通り過ぎ、皆姿勢を低くしました。

仕方のないことでした。皆、爆弾の落ちてくる怖さを、体験せずとも大阪や東京から傳へ聞いてをりましたし、自分の命ひとつを守るのもやつとであるのに、火中に飛び込むやうな真似を、進んでできるはずがありませんでした。いつもよりエンジン音が多く、果たしてこゝも東京大阪になるか、と思はれるほどでしたから、なほさらでした。

「では、私が行つて参ります。」

さうして背を向けやうとすると、

「待て。待て。」

と、先生たちは口々に云ふのです。

「神主様、危ないです。米英の戦闘機がもう空を飛び交つてゐるのですよ。いつ焼夷弾が落ちてくるかも知れないのに、あなたまで飛び出したら、二、次災害と謂ふ奴です。それに、あの子だつて、一寸道に迷つたと云ふところでせう、きつと、すぐにこちらに歸つてきます。」

と先生たちが口々に止めるのでした。それは尤もでございしましたが、私は、彼女を追いかけねばならない、不思議な確信を得てをりました。さつきの、怖いと云つた

顔が頭から離れませんでした。彼女に決定的なことが起こらうとしている予感を振りきれず、だから、私は、かう云ふ事にしました。

「お黙りなさい、人の子ら。」

壕が、静かになりました。

「私は神主ではありません。風祝です。私は諏訪の神の子であり、諏訪の守です。ゆえに、諏訪の子らは須らく私の子であります。子を見捨てる親がありますか。それとも、私の神の力が信じられませんか。」

私がかうして人前で神を名乗るのは、氏子の方々以外の前では初めてのことでした。日本には、すめらみこと、が、現人神として私なほよりも尊く高く坐します故、今やたゞの一臣民に過ぎぬ私が現人神を名乗るのは、角の立つことではございました。

しかし、それを敢てしただけに、効き目はてき面でもございました。誰一人として、口を利かなくなりました。

「あの子は私が連れ戻します。汝諏訪の子ら、こゝで安らかにお待ちなさい。諏訪の神の加護あれば、豈に大難あらんや。」

先生と、學童たちを見回し、私は彼らに背を向けました。もう止める者はいませんでした。壕の木戸を開けると、上り始めた日の光と、戦闘機のエンジンから漏れ流

れたやうな、鉄くさい風が私を迎へました。閉じられた木戸の上を、黒い影が通りました。

神殿へ戻ると、変わらず二柱は空を見上げておいでした。

「どうしたんだい。避難したんぢや無かつたかい。」

神奈子様は、私を見咎めるやうにして、お声をかけられました。

「あの女の子が、いなくなつて了つたのです。」

俄に、二柱の顔に緊張が走りました。見かけていらつしやらないか、お聞きしやうと思つてゐたのですが、必要はありませんでした。情けないことだ、と諏訪子様が仰いました。

「小供のひとりくらゐ、直ぐ見つけられる筈なんだけれどね。今は、山も森も、みんな怯へてしまつて、云ふことを聞かない。それどころか手前勝手に騒いで、うるさいつたら。」

私も、普段なら感じられる、風の氣配が胡亂なのに戸惑つてをりました。樂器の弦をいつばいに張つたやうな緊張が風に満ちてゐて、流れが全く読めなくなつてゐました。

あとから聞いたのですが、この時にはもう、空襲は始まつてゐたのでした。実際に空襲があつたのは、長野縣

の中心、国鉄長野驛などのある長野市で、私たちの諏訪は、それより南の地であつた爲に被害を免れてゐました。しかし、その殺氣を敏感に感じて、諏訪の山や森も殺氣立つてゐたのでした。

それに、と、神奈子様は、心底不思議さうに、首を傾げて仰いました。

「向うから、妙な氣配がするのよ。いえ、あるはずの氣配がない、と云つたはうが良いか知らん。向う、わからないけれど、森か知らん、湖か知らん。」

神奈子様が仰い切らぬ内に、私は驅け出してをりました。元より、女の子が向かう先の当てなど無かつたのです。しかし、この日の尋常ならざる様子のあの子が向かうならば、尋常ならざる場所に引かれるに間違い無い、と、確信されました。

いつしか、森に轉り込んでをりました。警報は遠くなら、森閑とした、微かな木々のざわめきが、耳に痛い程でした。森の風は、しづかな怖れと、怒りとを含みつつ、走り出したいのを我慢する小供のやうに、渦を巻いてくすぶつてをりました。不圖、この森に、幼い時からずつと慣れ親しんだ諏訪の森に、焼夷彈の雨の注ぐところを想像し、私は身震ひしました。赤々と燃え、倒れてゆく巨木が、自己嫌惡を覺える程に鮮明に想像され、私はそ

の考へを振り拂ふべく、走りました。そのときでした。

ズン、

と、大地ごと震はせるやうに大きな音が、遠くでしたのです。とつさに、私は、爆弾が落ちたのだ、と確信しました。同時に、諏訪ではあるまい、近くに落ちたならば、こんなものでは濟まなからう、とも思ひました。防空壕で、學童たちは怯へてゐるに違ひない。あの子は無事だらうか、どこかで震へてゐるのだらうか、と、たくさん考へが一氣に頭に上つて、私は木の根つこに足を取られて轉びました。早く女の子を見つけて、連れ歸らねばならぬ、無事にゐるだらうか、無事であればよいが、と、地面に手をつきながらも、頭の中を覆ふのはそのやうな事ばかりでした。

顔を上げやうとすると、ふと、森のいつにも増して暗いのを發見しました。この時間帯のやうな、朝の森は、天を覆ふ葉の隙間から日光が漏れ出て、地面に淡い光をやさしく投げかける、心地の良い薄暗さをたたへてゐる筈でございました。爆弾の噴煙が知らん、と思ひましたが、それともどこか違つてゐると思ひました。あとから考へても、長野市といふ遠方で巻き起こつた煙が、諏訪をかうも早く覆ふはずがありませんでした。

立ち上がつて、今度は、森の雰圍氣が、どこかヨソ、

しく感じました。慣れ親しんだ諏訪の森が、どこか異国の木立の連なりに見えるやうな、疎外感。思へば、この森で木の根つこに足を取られるなど、前代未聞、考へられぬことでございました。それは我が家の庭で道に迷ふやうなもので、途端に、私は木々が丸で見たことのない生き物のごとく見えてきたのです。天は彌々暗く、夜の帳を降ろすがごとし。さりとて星の一つも見えぬ暗黒でございました。木々は得体の知れぬ文様みたやうな肌理をして、胴の長い虫のやうに、き、警報はいつの間にか、ぴたりと止んでをりました。もう、これは、私の知る諏訪の森ではない。さう確信して、私は震へました。

そんな私の鼻先を、スウ、と、白いモヤのやうなものが過りました。それはボンヤリと圓く、ゴム風船のやうに微妙に形を変えつつ、フハ〜と浮遊し、暗がりの森の中にゐて淡く光を放つやうに見えました。それがひとつ過ぎたと思ふと、またひとつ、ふたつ、あちらにひとつ、ふたつ、とその数を増してゆくやうでした。

私は、それが、人の魂なのだを確信してをりました。そのモヤが鼻先をくすぐる度に、私の裡から、私のものではない感情が、怒り、悲しみ、絶望、痛み、孤独が、次々と沸いてくるのでした。それは、彼らの抱いてゐたものが、私に傳はつて來たのに違ひありませんでした。

やうやく立ち上がれば、辺りはすつかりそのモヤ、つまり、人の魂たちに覆はれてをりました。無数の圓い魂たちが、森の中を浮遊してをりました。それらは、凡そ、同じ方向を目指して移動してゐるやうでした。しだいに、魂は列を成し、森の奥へ奥へ、行進してゆきました。すすり泣く魂がをりました。痛みに悶へる魂がをりました。

母の名を呼び續ける魂がをりました。帝國萬歳、陛下萬歳と叫び續ける魂がをりました。自分が死んだことからもわからず、漠然と進む魂がをりました。それらすべてが等しくどこかへ吸ひ寄せらるゝに、釣られたのでせうか。私の足も、自然と動いてをりました。あれほどヨソく

しかつた森の風景が、丸で万里の先まで見通せるやうな、進むべき道を一から十まで、手取り足取り導かれるやうな心地でございました。森は脈動し、魂は行進を續け、森羅万象の一切が手を繋ぎ、根源へ至る喜びと悲しみを唱歌するやうでした。私の頭には、その歌以前の歌、原始的な感情の奔流がうずまき、恍惚の隨にそぞろ歩き、その先に見た、見知つた光景が、やつこのことで私の魂を我に返して呉れました。

魂たちが向かつてゐたのは、諏訪湖でした。豊かな水を湛へた壮大なる水面のぐるりから、魂たちが次々と集つてをりました。彼らは汀に至ると、フハリと地から遊

離し、湖面上を天に向かつて高く上つてゆきました。彼らの向かふ先は、湖の中心の上空、その一點でございました。そこには隙間がありました。空の一點に、上等の絹布をひと息に裂いたやうな、裂け目があつたのです。未曾有の光景を目にして、私はどう云ふべきか、未だに迷つてゐるのですが、隙間、と謂ふのが、最も適當であると思ひます。その隙間に、魂たちは吸ひ込まれてゆくやうでした。

暗黒の空の下、仄白くかゞやく魂たちが、列を成して湖上の一點に消えてゆく光景は、どこか、盆踊りの提燈の連なりに似たやうで、今となつてはやゝおかしみを感じます。思へば、その時はまだ午も同つてをらず、天に夜よりも黒い闇が降りてゐたのは不思議なことなのですが、私にそこまで考へる余裕はありませんでした。女の子が、ゐたのです。

女の子は汀に立つともなしに立つてゐて、天を、隙間を漠然と見てをりました。私は自分を取り戻すと、彼女の側に駆けました。肩を抱き、こちらを向かせると、彼女は先刻みたのと同じ、虚ろな目をしてをりました。私は、一瞬、なんと言葉をかけるべきなのか見失つてしまひました。考へ考へ、唇を濕して、やうやく、私は云ひました。

「歸りませう。こゝは危ないですよ。防空壕に入りませう。」

実際、私は自分の声のやたらと虚ろに響くのを感じてをりました。言葉は上滑りし、彼女どころか、私自身にさえ届かず、意味の分からぬ、空気の擦れる音のやうにして、消えてゆくのを、見てゐるしかありませんでした。

女の子は、矢張り、私の声を聞き届けた様子はなく、むしろ、私の姿が見えてゐるかも疑わしい様子でした。

私は自分の使命を思ひ出しました。最早、彼女に言ひ含めるよりも、まず、彼女の命を優先せねばなりませんでした。彼女の肩を確りとつかみ、神社に向かつて取つて返さうとしました。しかし、不思議と、私の腕にも足にも、力が入らないのでした。脱力せられたのいふのではなく、歸らうとする手足の動きだけを、忘れさせられたやうな感じでした。そうして、女の子はぼつりと、云ひました。

「行かなきゃ。」

私は彼女の肩から、いつしか、手を放してをりました。

彼女は再び目を湖上の一点、隙間のある上空にやり、一步、二歩と踏み出しました。すわ、入水、と思はれたとき、三步目、最後の足が、自然な軽やかさで地面を蹴り、さうして、それぎり、地を踏むことはありませんでした。

彼女は、一切の重みから解き放たれるやうに、宙にその身を躍らせてをりました。躍らせる、といふ言葉は適当ではないかもしれせん。ごくそこにあるのが当然、といふかのごとく、彼女の體は飛ぶものとして存在してゐた、といふべきでした。さうして、彼女は魂たちに混じつて、隙間を目指してゐるやうでした。

魂の行き場、と私は思ひました。隙間は、黄泉の入り口であるやうに思ひました。彼女が、死者の国へ向かつてゆく。それを許してはならぬ、と、私は、神通力を集中しました。嘗て、私には、人の空を飛ぶという認識が存在してをりませんでした。考へもしないことをせうして実現できませう。しかし、そのとき、女の子が見本を見せて呉れたのですから、あとは簡單でした。風祝の奇跡を呼ぶ力を以て、私は自分の體に飛ぶやう命令しました。さうして、地から足の離れる感覚を付け焼刃で飼ひ慣らし、一気に彼女の後を追ひました。進むにつれ、魂たちの数は増しました。それらを追い越し、女の子の背が迫つたときでした。

「こんばんは。」

と、声をかけるものがをりました。暗く、不思議な世界の中で、それは妙な現実感を持つて、確りと、私の耳に響きました。それは私の進行を妨げるやうにしてゐた、

ひとりの女性から放たれたのでした。薄暮の空のごとき紫の洋装を纏い、金色の髪をなびかせた、貴婦人風の、どこか現実感を欠いた女性でした。私は、宙ぶらりんのまゝ、静止せざるを得ませんでした。

「誰ですか。おどきなさい。」

さう云ふと、彼女は笑ひました。微笑ましい小供の冗談を聞いた、といふやうな笑ひでした。

「あの子は、こつちの子よ。大丈夫、あの子はこつちで預かります。きつと、生きていかれるでせう。」

さう云ふ彼女は、いつしか、私の鼻先に迫つてをり、私はギョツとしました。薄く開かれた目は赤い光を湛へ、有無を言はさぬ剣呑さが漂つてをりました。彼女はくつくつと、喉を鳴らして、また笑ひました。

「こちらでは、この六十年も失はれてゐるのですね。当然と謂へば、当然ですけれども。死と再生の年、かうも大きなものになるとは思ひませんでした。」

独り言のやうにしてそれ丈云ひ、赤い目玉が私を捉へました。

「あなたたちは、またお逢ひできさうですわ。だから、今日はこれでお引き取り下さいまし、忘れられつつある神様。あなたたちが本当に忘れられたときに、わたくし供は歓迎いたします。」

さうして扇子が開かれたときには、私はもう何が起つてゐるのか、全く分からなくなつてゐました。私は、墜落したのです。

「御機嫌好う。」

意識がなくなる間際、天地が反轉した視界が閉じられる中で、私は、湖岸が、いつばいの眞赤な彼岸花に覆はれてゐるのを、確かに見たのです。

次に目を開けたときには、神奈子様と諏訪子様が私を覗きこんでをりました。神社の神殿でした。起き上がるど、二柱が、安堵の息を吐かれたやうでした。

「殆ど二日、眠つてゐたよ。」

神奈子様が仰いました。

「御免よ。お前を追つても、どこからも見つからなかつた。この世から消えて了つたと思へなかつたよ。湖の側に寝てるお前を見つけて、それだけ神奈子が泣いたか。」

「神が妄言を弄するでない。」

神奈子様が諏訪子様を小突きました。私は二柱の様子にちよつと笑ひ、さうして、すべてを思ひ出しました。

「あの子は、行つて了ひました。」

ど、私が云ふと、神奈子様は、さうかい、と仰い、そ

れ以上何も云はず、聞きもしませんでした。

「先生たちも、もうあきらめて了つてゐたよ。」

諏訪子様が仰いました。私は立ち上がりました。諏訪の地は無事なのだ、と思ひました。

「行つておわけ。」

と神奈子様が仰い、私は頷きました。神殿の戸を開け放ち、朝日の中、境内を横切り、社務所に入ると、廣間に學童と生徒たちが集ひ、ラヂオの前に伏してをりました。

さうして、私たちは、玉音を賜りました。

これで、私のお話は終りです。かうして語り了へても、矢張り、これが何だつたのか分からず仕舞いでございます。しかし、かうしてひとつの区切りをつけたことで、私はいくらか自分を整理できたやうに思ひます。あの子は、どうなつたのか、今や知る由もありませんが、いつか再會する事を祈り、彼女が歸つてこられるやう、諏訪も、東京も、この国も、復興せねばなりません。後世、例へば、これを手にしたのが私の後繼者か、それに連なるものであるならば、ひよつとして、あの女性とはもう顔見知りでせうか。あの女性の予言は、不思議と、実現せられるのではないかと思ひます。さう、私はもう、後世に思いを馳せるほかに、恢復してをります。瓦礫ばかり

りのこの国ですが、屹度また立ち上がるといふ、奇妙な確信を抱ひてをります。だから、私は、祈りを以て、この文章を終らうと思ひます。

この国に、国の子らに、神の加護ありますやうに。諏訪に、諏訪の子らに、神の加護ありますやうに。

「昭和20年のナイトフォール」PDF公開版

二〇一六年五月九日公開

同 五月十日修正

初出

「Viraja Aupamyā」Red Tail Cat

第九回博麗神社例大祭 平成年二十四年五月二十七日

http://www.scn.or.tv/viraja_aupamyā/

本文フォント

ORADANO明朝フォント Ver. 0.2016.0427

<http://www.asahi-net.or.jp/~sd5a-ucd/freetoms/Ora>

dano-Mincho/

作 春日野土筆 (twitter: @tsukushi_k)

無断二次配布・轉載はご遠慮願います。